

西田哲学における「場所」と「環境」の関係 構造

竹内, 昭

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

123

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

27

(発行年 / Year)

2003-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004674>

西田哲学における「場所」と「環境」の関係構造

竹内 昭

1

一般的な「場所」と「環境」の関係構造については、すでに〈自己言及性〉の枠組みの中で論じ、ここでは、関係の相互性としての「場所」を成立させる機能こそ〈自己言及性〉にほかならず、それによって「場所」が基礎づけられ、その「場所」はやがて「環境」という具体的な相をとると考える、と書いた。ついでこの考えを敷衍して、この構造は西田哲学における「場所」と「環境」との関係に典型的に見られるとし、西田哲学の〈自己言及性〉構造を論ずるなかで、そのあらましを考察した。ここでは、ことに西田幾多郎の二つの論文、〈種の生成発展の問題〉（一九三七年）と〈絶対矛盾的自己同一〉（一九三九年）において、「場所」は「環境」概念に変成発展して論じられる、と書き、その関係の大枠を吟味した。

* 前者は、〈自己言及性試論〉（法政大学教養部紀要）第九三号、一九九五年二月）、後者は〈西田哲学における〈自己言及性〉の構造〉（同上、第一二〇号、二〇〇二年二月）。なお両論文とも、文献（一）に収録され、それぞれ第一章、第三章を構成している。

この小論では、以上の論考を承けてさらに考察の幅を広げ、西田哲学における「場所」と「環境」との関係に重点的に照明を当て、その構造の解明を試みる。

そこで、順序として、まず西田哲学で論じられている「場所」と「環境」それぞれの概念の根本的な意味の違いおよび両者の関係を、全体的な把握にもとづいて仮説として述べ、つぎにそれを諸著作に戻って検証し、さらにそ

のように検証された仮説は一般にどう解釈されるかを結論として吟味するという方法を探る。

西田が「場所」と「環境」を論じている箇所を、その問題を主にあつかう諸著作について見ていくと、その関係はおおむねつぎのように読みとることができる。

すなわち、「場所」は、「場所の論理」として論理的に解され、人間の知が成立する究極の場としての抽象相、すなわち論理的概念とみなされる。この「場所」は「述語的一般者」のことと規定される（『一般者の自覚的体系』一九三〇年、全集5、九八頁）が、究極の述語は、「述語となって主語とならない述語面」（超越的述語面）であり、このあらゆる述語の述語は「無の場所」と規定される（『飭くものから見るものへ』一九二七年、全集4、三四二頁以下）。「無の場所」は、したがって他の場所によって置き換えられることはできない、言いかえれば他の述語によって述語されることがないから、究極の場所ということが出来る。この「無の場所」は古典論理の包摂関係から導かれたものであるから、純粹な論理的な概念であり、まったく実体的な意味をもたない。

* 西田の著作は、岩波書店版全集（全一九巻、第四刷、一九八七―一九八九年）を用いた。引用する場合は、仮名遣い・表記は原文のままとし、漢字は旧字体を新字体に改めた。

これに対して、「環境」は、「場所」が変成発展した概念で、人間が存立する場の具体相と解される。「述語的一般者」としての論理的・形式的な「場所」概念が「自己形成」が成立する場として機能したときに、「場所」は実体化して「環境」に変成すると考えられる。「場所」が人間の知が成立する「無の場所」なら、「環境」は、人間が存立するいわば「有の場所」ということができよう。ただし、ここにいる「環境」概念は、必ずしも一九七〇年代に成立した環境倫理学ないし環境哲学、あるいはいま広く社会問題にもなっている環境問題という「環境」とそのまま一致するものではないし、もしそう考えたら短絡のそしりを免れない。しかし両者はまったくの別概念ではなくて、この生態系という意味での「環境」は、前者の概念がさらに具体的に表現されたものとみて差し支えないと考える。すなわち「環境」という場合、現代の環境問題の文脈においてはその特殊相ととらえることができるなら、西田の「環境」概念はその普遍相と解することができる。ここではその脈絡で考察する。

* この「無の場所」と「有の場所」との関係については、とりあえず、文献(2)の解説を借りておこう。——「場所というところ、さしあたってはどうしても限られた場所ということになります。しかし、場所が限られている、あるいは、限られた場所があるということが本当に言えるためには、その限られた場所がそこに〈於てある〉ところがなければならぬはずです。それは、〈限られた場所〉の場所ですから、最終的には無限の開け (die unendliche Offenheit) というようなところでしよう。〈限られた〉ということは、必ずその限られたものの外にあって、その外から、限られているということですから、限られた場所がある場合、最終的に場所を越え包む無限な開けのうちにあると言わなければなりません。場所に於てあるとき最終的にはいつも同時に無限の開けのうちにある。場所に於てあることよって同時に無限の開けに於てあるということですから、先回りして西田の術語で単純化して言いますと〈有の場所〉と、〈有の場所〉が於てある〈絶対無の場所〉ということですから(三二二頁以下。傍点は原文)。

西田における「場所」の三位相、すなわち「有の場所」「対立的無の場所」「絶対的無の場所」については、次節の最終部で改めて検討する。

* * 西田は、ことに〈私と世界〉(哲学の根本問題(行為の世界)一九三三年、全集7、一二五頁以下)で、「環境」概念の特殊相を「生物的環境」とし、そこに「於てある」ものを「生命」、より具体的には「生物的個体」として、その相互依存関係をかなり詳しく論じている。それについては、本稿3節で改めて吟味する。

2

では、以上で述べた仮説はどのように検証されるか、まず「場所」概念の意味について、それが主に論じられる著作に即して吟味してみよう。

* 主として、「働くものから見るものへ」(一九二七年、全集4)の「後編」、¹⁾「一般者の自覚的体系」(一九三〇年、全集5)、「無の自覚的限定」(一九三二年、全集6)、「哲学の根本問題(行為の世界)」(一九三三年、全集7)による。

「場所」と関連して「鏡」が頻繁に登場するが、これは「場所」を説明するための比喩と目される。まず「自覚の鏡」によって「場所」が暗示される。

「一般の中に特殊を含む具体的一般者といふのは自己の中に自己を映す自覚の鏡に外ならない。無内容と考へ

られる自己同一の判断はかゝる鏡面其者を示すものと考へることが出来る。(略)併し映すものと映されるものとが一とならない限り、主客相対立し映されるものの背後に、超越的なる本体を見ると共に、映す鏡面の方に於ては抽象的概念の影を見るのである」(働くもの)一九二五年、「働くものから見るものへ」一九二七年、全集4、二〇六頁

この「鏡」が「場所」の具体的な表現、あるいはその比喩であることは、つぎの引用によって示される。

「此の如き自己自身を照らす鏡といふべきものは、単に知識成立の場所たるのみならず、感情も意志も之に於て成立するのである」(場所)一九二六年、「働くものから見るものへ」一九二七年、全集4、二二三頁

「而して対象が意識を超越すると考へるだけならば、単に特殊なるものが一般なるものに於てあると云ふの外ないが、更にこの場所の意味を深くして、所謂意識も之に於てあると考へるならば、真の場所は自己の中に自己の影を映すもの、自己自身を照らす鏡といふ如きものとなる」(同上、二二六頁)

「私の場所といふのは、単に所謂一般概念といふ如きものではなくして、特殊が於てある場所である、対象を内に映して居る鏡の如きものである。かく云へば、鏡と対象とが別のものと考へられるかも知らぬが、一般が特殊を自己自身の限定として、之を自己の内に成立せしめると共に、特殊に対しては何処までも一般其者として特殊とはならない、単に特殊が之に於てある無なる場所と考へられた時、自己の中に自己を映す鏡となるのである、我々が普通に用ゐる映すと云ふ語の根柢にもかゝる考が含まれて居なければならない」(左右田博士に答ふ)一九二七年、同上、三三〇頁

この三つの引用とも、一般的な「場所」の意味を「鏡」によって具体的に説明しているが、とくに第三の引用で、「無なる場所」という西田哲学に独自の術語が登場する。そこでつぎにこの「無の場所」に目を転じて検討してみ

よう。

「述語面が無限大となると共に場所其者が真の無となり、之に於てあるものは単に自己自身を直観するものとなる。一般的述語がその極限に達することは特殊的主語がその極限に達することであり、主語が主語自身となることである」(《場所》一九二六年、「働くものから見るものへ」一九二七年、全集4、二八八頁)

「真の無の場所に於てある主客合一者、即ち自己自身を見るものが、カントの意識一般の対象界といふ如きものに映されたのが意志である。故に知的自覚の底には意志的自覚が見られ意志的自覚の奥には自己自身をみるものがある。論理的に云へば、全然意識一般の立場を越えたもの、即ち自己自身を見るものが、意識一般の立場に於て述語を有つ時、意志といふ如きものが考へられるのである」(《左右田博士に答ふ》一九二七年、同上、三二六―三二七頁)

「かゝる場所に於てあるものが真に自覚的なものである、自己自身を見るものである。かゝる無の場所といふものが、何等かの意味にて一般概念的に限定せられる限り、一種の意識面が限定せられ、之に於て概念的知識の世界が成り立つのである」(同上、三二八頁)

この三つの引用のうち、第一引用は、「場所」は包摂論理(集合論理)、すなわち述語的論理の述語に当たること、そしてその述語面が無限大になつたとき「真の無の場所」となることが説かれている。

第二引用では、ちよつと分かりにくい論述になっているが、要するにこの「真の無の場所」において主客合一者、すなわち自己自身を見るもの、言いかえれば意志が成立する、ということが明らかにされる。意志が「真の無の場所」で自己自身を見るところであるなら、「場所」の成立には「自己言及性」の構造が関わっていることが改めて知られる。

* 「自己言及性」が「無の場所」の原理であることは、つぎに引く文言に明確に示されている。――「私はいつも云ふ如く

自覚といふのは自己に於て自己を見ると考へられ、而も自己が見られない所に即ち自己が無となつた所に眞の自己を見る
と考へられるのである。対象的に見られるかぎり、それは自己でない、極限として見られると云つても、それは既に眞の
自己ではない。自己に於て自己を見られるといふのは何処までも対象的なものを包むといふことを意味するのである、場所
が無となつて行くといふことを意味するのである。「無の自覚的限定」一九三二年、全集6、八九頁。ここでいう「自己
に於て自己を見る」とはすなわち「自己言及性」のことであり、それが「場所が無となつて行く」ことだということが明
言されている。また、自覚を「自己が自己に於て自己を見ること」だといひ、そこにおいて「自己」が「自己に於て」
という事態が成立し、それが「場所」そのものとなる（「一般者の自覚的体系」一九三〇年、全集5、四二七頁）、ともい
つているが、この「自己が自己に於て自己を見ること」はまさに「自己言及性」のことにほかならない。さらに、別の著
作でも、「自覚といふのは自己が自己に於て自己を見ること」といふことを意味すると考へるならば、かゝる意味に於て自覚の場
所と考へられるものは社会といふ如き意味を有つたものでなければならぬ（「無の自覚的限定」一九三二年、全集6、
二八九頁）といつているが、ここでも明瞭に「場所」を「自己が自己に於て自己を見る」という「自己言及性」の視点で
説いている。（文献（一）、「第三章 西田哲学における「自己言及性」の構造」参照。）

第三の引用では、「自己言及性」によつて成り立つ「無の場所」は、「概念的知識の世界」すなわち人間の知の根
本的な側面を成立させる根拠であることが明かされる。

以上で、ものを映す「鏡」にたとえられた「場所」が、述語面が無限大になつたとき「眞の無の場所」となると
いう論述の過程をみてきたが、ではその「無の場所」とはいかなる属性をもつのか、続いてそれを検討してみよう。

「我々が物事を考へる時、之を映す如き場所といふ如きものがなければならぬ。先づ意識の野といふのをそれ
と考へることができる。何物かを意識するには、意識の野に映さねばならぬ。而して映された意識現象と映す意
識の野とは区別せられなければならぬ。意識現象の連続其者の外に、意識の野といふ如きものはないとも云ひ得
るであらう。併し時々刻々に移り行く意識現象に対して、映らざる意識の野といふものがなければならぬ。之に
よつて意識現象が互に相関係し相連結するのである」（「場所」一九二六年、「働くものから見るものへ」一九二七年、
全集4、二二〇頁）

「作用といふのは、映された対象と映す場所との間に於て現れ来る関係と思ふ。単に映されたもののみが考

へられた時、それは何等の働きなき単なる対象に過ぎない。しかしかゝる対象の背後にも、之を映す鏡がなければならぬ、対象の存立する場所といふものがなければならぬ。勿論、此場所が単に映す鏡であつて、唯対象が之に於てあるといふのみならば、働く対象を見ることはできない。全然己を空しうして、すべてのものを映す意識一般の野ともいふべきものに於て、すべてが単なる認識作用として全然作用を超越したものと考へられるものによるのである」(同上、二二三頁以下)

「此故に意志はいつも自己の中に知的自己同一を抱くと云ふことができる。主語の方向に於て無限に達することのできない本体が見られる如く、述語の方向に於て無限に達することのできない意志が見られるのである。而してその極、主語と述語との対立をも超越して真の無の場所に到る時、それが自己自身を見る直観となる」(同上、二八四頁)

第一の引用では、人がものを考えるというのものを映すことであり、それにはそれを映す場所を必要とし、その場所を「意識の野」と規定する。ものを「場所」としての「意識の野」に映してその認識が成立するというのである。

第二の引用では、ものを映す場所を「鏡」にたとえて、さらにそれを「意識一般の野」と説いている。

* ここは最初に検討した「場所」を「鏡」に譬える個所の引用群とも重なるが、「意識の野」の共通項を優先してここで取り上げた。

第三の引用では、包摂関係、すなわち述語的論理としての主語と述語の関係が極まったときに「真の無の場所」にいたり、そこに「自己自身を見る直観」が成立するという。したがつて「意識の野」は同時に「自己自身を見る直観」でもあることになる。

以上によつて、「無の場所」は「意識の野」であることが明らかにされたが、ではその「意識の野」はどのような機能をもつのか。つきにそれを検討してみよう。ここではそれを「場所が場所自身を限定する」はたらきとみて、

その個所を引用する。

「ノエシスが直にノエシス自身を限定するといふ方向に於て、我々は自己自身を見ると考へることができ、喜ぶ自己よりも悲む自己は大であると云ふことができる。かゝる方向の極限に於て、我々は意識的自己其者を見る¹⁾と考へることができる、即ち場所が場所自身を限定し、ノエシスが直にノエマになると云ふことができる」(「一般者の自覚的体系」一九三〇年、全集5、三二〇頁)

「単なる主客合一が自覚ではない。自己が自己に於て自己を見ると考へられる所に、自覚の意味があるのである。場所が場所自身を限定すると考へられる所に自覚の意味があるのである」(「哲学の根本問題(行為の世界)」一九三三年、全集7、八八頁)

「我々が行為的と考へられるかぎり、ノエシスはノエマを包むと考へられねばならない。創造的なる世界は個物と個物とを限定する場所的限定として、場所が場所自身を限定する、自己が自己自身に於て自己を見るといふ意味を有するが故である」(同上、八六頁)

西田の著作には頻繁に「ノエシス」と「ノエマ」という対立語が登場する。これはギリシャ語の *noesis*, *noema* に由来し、フッサールの現象学では独自の概念として使われる。フッサールによれば、意識はつねに何ものかについての意識であるという志向性を持ち、それには作用的な面と対象的な面があり、前者はノエシス (*Noesis*)、後者はノエマ (*Noema*) と名づけられる。すなわち、「両概念は、すべてのノエシスは必ずその相関者としてそれぞれのノエマを持つという志向的体験に見られる平行的構造を明らかにするために導入された」のである。要するに、ノエシスあるいはノエシスの契機は意識の機能的、作用的側面を意味し、ノエマあるいはノエマ的契機は、意識の作用の内面における対象的側面、客観的側面を指す。

西田はこの現象学に由来する「ノエシス」と「ノエマ」という術語を導入して、独自の「場所」論を展開する。

これらの引用の前後に類出するこの術語の用法を吟味すると、西田は人格的な自己にノエシス面とノエマ面の二面を考え、前者を意志、後者を身体とみなしていたと読みとれる。図式的に見れば、精神・主体がノエシス面、身体・客体がノエマ面ということになる。しかし西田がこうした対立語を導入したのは、むしろこうした精神／身体二元論的な見方を打破するためで、結局は、身体は主体であるとともに客体であり、ノエシス面であると同時にノエマ面であると主張した。これによって西田において三元論図式は克服され、身体は精神化し、同時に精神は身体化したと考えられる。かくて人格的自己は「働くもの」であると同時に「見られるもの」になり、そこに「行為的主体」が成り立ったのである¹⁾。

第一の引用では、こうした事態を「場所が場所自身を限定」することと表現しているとみられるが、それは、それをさらに「ノエシスが直にノエシス自身を限定する」あるいは「ノエシスが直にノエマになる」ことと言いかえていることから明らかである。

第二の引用では、この「主客合一」を「自己が自己に於て自己を見ると考へられる所」といい、さらにそれを「場所が場所自身を限定すると考へられる所」と言いかえ、そこに真の自覚の意味があると主張する。

第三の引用にいたると、「行為的」主体が登場し、それを「ノエシス」が「ノエマ」を包むことだといひ、それはさらに、「個物と個物とを限定する場所的限定」、「場所が場所自身を限定する」、「自己が自己自身に於て自己を見る」と言いかえられる。

ここでは、「自らを限定する」**「場所」**とは、要するに「個物と個物とを限定する場所的限定」としての「創造的な世界」のことだといっているが、ではそうした**「場所」**はどのような位相をもつのであろうか。それを説くのがつぎの引用である。

「唯、真の無の場所に於てのみ自由なるものを見ることが出来る。限定せられた有の場所に於て単に働くものが見られ、対立的無の場所に於て所謂意識作用が見られ、絶対的無の場所に於て真の自由意志を見ることができ

る」(「場所」一九二六年、全集4、一三三頁)

「場所」とは、広い意味ではすべての主語を包摂する述語一般、すなわち「述語となつて主語とならない述語面」(超越的述語面)、言いかえれば、すべての特殊を包む一般者のことであるから、そこに包摂されるものの違いに応じて異なった位相が生じる。それを論じるのがこの引用で、ここでは、「有の場所」、「対立的無の場所」、「絶対的無の場所」と、「場所」の三位相が説かれる。第一は「働くもの」、すなわち一般に有るものが見られる場所であり、第二は先に「意識の野」といわれたもので、したがつてそこは「意識作用」が見られる場所であり、第三は「真の無の場所」で、そこにおいてのみ「真の自由意志」が見られるという。要するに、「有の場所」の極限に「対立的無の場所」が位置し、さらに「対立的無の場所」の極限に「絶対的無の場所」が措定されるというのである。西田の著作に頻繁に出てくる独自の術語でいえば、一般に有るものは「於いてあるもの」として「有の場所」を構成し、それは「意識の野」を媒介として、「於てある場所」の極限としての「真の無の場所」を基盤として成り立つということであろう。

* この「於てあるもの」「於てある場所」は、西田の「場所」論の中核をなす用語で、「場所」を説く著作全般にわたつて頻出するが、ここでは本稿で引用している箇所にかぎつて指摘しておこう。「於てあるもの」は、全集4、二八八頁、全集6、三五〇頁、あるいは「場所に於てあるもの」は全集4、三二八頁、また「於てある場所」あるいは「於てある無なる場所」は、全集4、三三〇頁、に出てくる。ここでは紙幅の関係で、その詳しい解釈についてはこれ以上立ち入らない(これについては、文献(2)の三三三頁以下で簡潔に説かれている)。なお、参考のために紹介すれば、これらの術語のドイツ語訳は、前者は「Darin-Befindliches」、後者は「Ort, worin」と「提案」されている¹⁾。

3

以上によつて、「場所」論の大筋を著作に即して検討し、冒頭に述べた仮説を検証してきたが、つきに同様にし

て、「環境」概念の展開についてそれが主に論じられる著作を読みながら吟味してみよう。

* 主として、《私と汝》（一九三二年、「無の自覚的限定」全集6）、《私と世界》（一九三三年、「哲学の根本問題（行為の世界）」全集7）、《種の生成発展の問題》（一九三七年、「哲学論文集第二」全集8）、《絶対矛盾的自己同一》（一九三九年、「哲学論文集第二」全集9）による。

まず、「環境」概念が専一に論じられる箇所を引用する。

「有るものは何かに於てであると考へられる如く、物は環境を有つと考へられねばならない。而もかゝる環境は無限に広く無限に深く考へられるものでなければならぬ。〔略〕物と環境との間に所謂合理的関係といふ如きものが考へられるかぎり、個物といふものは考へられない。個物は環境に包まれ何処までも環境から限定せられるといふ意味を有すると共に何処までも環境から限定せられないものであり、却つて環境を限定する意味を有つたものでなければならぬ。環境は個物に対して単にその働きの場所といふ如き意味を有つてゐなければならぬ。〔略〕故に個物と環境との間は互に非合理的と考へられる、個物に対して環境は偶然的と考へられ、環境に対して個物は偶然的と考へられる。斯くして同一の環境に対して自由に自己自身を限定し行く無数の個物が考へられるのである。而も環境と個物は固、無関係ではない。環境なくして個物といふものもなければ、個物なくして環境といふものもない」（《私と汝》一九三二年、「無の自覚的限定」一九三三年、全集6、三四四頁以下）

引用の冒頭にいう「有るものは何かに於てある」とは、一般に有るものは場所においてある、ということである。その有るものが物という具体的な相をもつたときに、やはり場所の具体相としての「環境」をもつということである。そうして個物と「環境」の関係は、非合理的な相互依存関係をもつと説く。かくて、「環境が個物を限定し、個物が環境を限定するといふ弁証法的過程が考へられ、場所的限定の意義に於て偶然的なる無数の個物といふものが考へられる」（同上、三四六頁以下）のである。ここに、場所論で説かれた「場所的限定」は、「環境」においては「環

境が個物を限定し、個物が環境を限定する」という具体的な形で現れることが明らかにされる。この「環境」における「場所的限定」は、以下この著作で繰り返し論じられる。

「限定するものなきものの限定として弁証法的運動と考へられるものが、右の如く環境が（於てあるもの）を限定し、逆に（於てあるもの）が環境を限定すると云ふことであり、環境といふものがかゝる限定に欠くべからざる一面であるとすれば、私は之によつて我々の意識と考へるものが如何にして生じ、如何なる意味を有するものなのかを明かにすることができると思ふ。物は環境に於てあり、個物は環境的限定の極限として考へられねばならぬ。而も単にかゝる意味に於て個物といふものが考へられるのではなく、逆に個物が環境を限定するといふ意味がなければならぬ。かゝる逆限定といふものが考へられるかぎり、そこに中和的環境といふものが考へられねばならない、過程的限定を離れた単なる場所的限定といふ如きものを考へることが出来る」（私と汝）一九三二年、「無の自覚的限定」一九三二年、全集6、三五〇頁以下）

場所論では「於てある場所」と「於てあるもの」の関係が説かれたが、ここでは、前者の言葉は出てこないけれども、その具体的相を「環境」とし、その「環境」に「於てあるもの」を物とし、それらが相互依存作用、すなわち「逆限定」作用をもつことが明らかにされる。

「我々は普通に一般が個物を限定すると共に個物が一般を限定する、環境が個人を限定すると共に個人が環境を限定すると考へる。或は客観が主観を限定すると共に主観が客観を限定すると考へる。我々は行為によつて主観が客観化せられ、客観が主観化せられると考へるのである。そこに弁証法的過程といふものを考へることが出来る。併し私はかゝる意味に於て一般者の限定と考へられるものは、上に云つた如く個物と個物との自己限定といふことが考へられると思ふのである。個物と個物との相互限定といふことは、絶対に相反するものの自己同一

として、場所が場所自身を限定することを意味するのである〔「哲学の根本問題（行為の世界）」一九三三年、全集7、一〇六頁以下〕

ここでいう「場所が場所自身を限定すること」は、「場所論」で「場所」の機能の本性として明らかにされたが、いまそれを「環境」に限定していえば、この「場所的限定」は具体的には「環境が個物を限定すると共に個物が環境を限定する」形で現れるというのである。

この「環境」がさらに具体的な相をとると、つぎのようになる。

「生命といふものなくして生物的環境いふものなく、生物的環境といふものなくして生命とそのものといふものもない。個物的生命といふのは、生物の個体が自己の環境を個物化すること即ち生命化することであり、逆に環境が個物化すること即ち物質が生命化することである。」〔「哲学の根本問題（行為の世界）」一九三三年、全集7、一三五頁〕

ここでは「環境」概念の特殊相について考察し、「環境」を「生物的環境」に、そして一般に「物」を「生命」に、「個物」を「生物的個体」に置き換えて、「環境」の具体的な側面を展開している。

さらにこの生命環境のあり方は、「場所が場所自身を限定する」の特殊相としての「環境が環境自身を限定する」という構造で明らかにされる。

「生命が生命自身を限定するといふことは、個物が個物自身を限定するといふことでなければならぬ。生命の底には何処までも個物が個物自身を限定するといふ意味がなければならぬ。併し個物は個物に対して限定せられるのである。個物が個物自身を限定すると云ふには場所が場所自身を限定する意味がなければならぬ。

弁証法的一般者の自己限定として生命といふものが考へられるのである。環境なくして生命といふものはない。単に生命そのものといふ如きものはない。生命が生命自身を限定するといふには、環境が環境自身を限定するといふ意味がなければならない。故に生命には必ず逆限定といふものが伴ふのである。生は死を意味し、死は生を意味せなければならない」(『哲学の根本問題(行為の世界)』一九三三年、全集7、一三二頁)

先に、「於てあるもの」と「於てある場所」が相互依存関係をもつということ、そしてそれは「逆限定」作用であることを吟味したが、それが、生命環境においては「生命が生命を限定すること」とし、それをさらに具体的に「生は死を意味し、死は生を意味する」ことだといっている。ここに、「場所が場所自身を限定する」、「環境が環境自身を限定する」、「生命が生命自身を限定する」、「個物が個物自身を限定する」とは、普遍・特殊の四段階を示している様はつきり読みとれる。

同じ趣旨の文言は、この《私と世界》の中で繰り返し説かれる。主な個所を挙げておこう。——「生物的生命に於ても、個物が個物自身を限定するといふことは環境を個物化することであり、それは逆に環境が環境自身を限定すること、環境が自己自身を個物化することである。斯くして合目的の世界といふものが考へられ、過去から未来に進行する無限なる生命の流といふ如きものが考へられる」(同上、二三三頁)といつて、「環境が環境自身を限定する」ことを、合目的の世界の原理として説明する。「個物的限定が即環境的限定の意義を有つと云ふことができ、私の所謂絶対的現在の自己限定に於ては、何処までも環境が環境自身を限定すると考へられるに對して、何処までも個物が個物自身を限定するといふ立場を考へることができる」(同上、一四六頁以下)。「弁証法的一般者の自己限定として弁証法的過程と考へられるものは、すべて個物が個物自身を限定すると共に環境が環境自身を限定すると考へられる。それが我々の生活過程と考へられるものである」(同上、一四八頁)。ここに新たに、「環境が環境自身を限定する」とは、具体的に「我々の生活過程」のことだと説いている。「個物が個物に對して個物自身を限定することが環境が環境自身を限定することを意味し、個物が環境を限定し環境が個物を限定すると考へられる生

命の自己限定と考へられるものは、かゝる意味に於て世界が世界自身を限定するといふ意味を有つてゐなければならぬ」(同上、一六〇頁)。

以上の著作では、「環境」概念は、主に「場所」論を承けてそれとの関係において、あるいは前者は後者の特殊相として検討されたと見ることが出来る。しかし《種の生成発展の問題》(一九三七年)および《絶対矛盾的自己同一》(一九三九年)になると、「環境」概念はそれ自体として、もっぱら「主体」との関係において、より積極的にかつ本質的に論じられる。

まず《種の生成発展の問題》においては、「環境」概念は、「主体」との関係、「作るものと作られたもの」の関係、「歴史・進化の世界としての環境」と三つに類別して読むと見通しが利く。すなわち、「環境」の本質、「環境」とそこに「於てある」個体との関係、「環境」の具体相、である。

「主体が環境を限定し環境が主体を限定すると云ふことなくして個性的といふものはないが、主体が環境を形成し環境が主体を形成するには、個性的なるものを通すと云ふことがなければならぬ。主体が環境を形成すると云ふことは、主体的なものが環境となると云ふことではない。主体が環境となるといふことは死である。又環境が主体となることもできない、それは環境の自己否定である。形相は質料とならない、質料は形相とならない、主は客とならない、客は主とならない」(《種の生成発展の問題》一九三七年、全集8、五〇三頁)

「主体と環境とは何処までも相反するものでありながら、否定を通じて相限定する、積極的に云へば個性を通じて相限定する。逆に作られたものが作るものを作るといふ様に、個性的に自己自身を限定する世界は、それに於て何処までも主体が環境を、環境が主体を限定すると考へられる世界でなければならない」(同上、五二三頁)

「場所」の次元に引きつけていえば、上の第一の引用にいう「主体」は「於てあるもの」、「環境」は「於てある場所」である。ここでは、そういうものとしての「主体」と「環境」は相限定し合つて世界を構成すると説く。し

かしこれらは概念としてはあくまでも独立で、「主体」と「環境」を形相と質料、あるいは主体と客体に類えて、それらが相互関係をもちながら、相互に転化するのではないという。

それを第二の引用では、「主体と環境とは何処までも相反するものでありながら、否定を通じて相限定する」と敷衍する。その関係をさらに「作られたものが作るものを作る」と言いかえるが、その点を強調すれば、つぎの引用群になる。

「環境が主体を変ずる、否、種が世界から生れると云ふことは、作られたものが作るものを作るといふことから可能となるのである。生命といふものは、いつも作られたものとなる所にあるのである。生物的生命に於ても、我々は食物を消化する、物質を主体化する。併し食物を消化するといふことは、食物を消化するものを生産することである。消費が生産であり、生産が消費であり、生産と消費とが弁証法的に一である所に、生物的生命といふものがあるのである」(全集8、五〇一頁)

「主体が環境を、環境が主体を限定し、作られたものから作るものへと、個性的に自己自身を限定して行く歴史的世界は、その根柢に於て無数の個と個とが対立し、而も多即一即多として、絶対矛盾の自己同一的自己自身を形成し行く世界でなければならぬ。個の外的媒介としてそれは環境的であり、その内的媒介としてそれは主体的である。故に主体が環境を、環境が主体を限定し、世界が個性的に自己自身を形成すると考へられる所に、いつも個が自立的に働くと考へられなければならない」(同上、五〇二頁)

第一の引用では、「環境」を「作るもの」、「主体」をそれによって「作られたもの」とし、この二者の間には、前者は後者を作ると同時に、後者が前者を作る、すなわち改変していくという相互依存関係があるという。それをここでは「世界」と「種」の關係に置き換え、また具体的には、生物生命における食物摂取に関する消費と生産との關係に当てはめて説明している。

第二の引用では、「作られたもの」と「作るもの」との関係を、「主体が環境を、環境が主体を限定し」と表現し、「環境」と「主体」とは相互に限定し合う関係をもつと主張する。それを具体的に「個性的に自己自身を限定して行く」場所とみれば、それは「歴史的世界」と解釈されるというのである。この「歴史的世界」に眼を転じて論じるのが、つぎの引用群である。

「歴史的世界に於ては、単に主体が環境を限定するのではない、逆に環境が又主体を限定するのである。人間が環境を作り環境が人間を作ると考へられる。それは生物進化に於ても同様である。歴史的世界に於ては、形相といふもその外にあるのではなく、それもその世界から生れるものでなければならぬ。形相が質料を構成するが、又質料から形相が生れる」(全集8、五〇〇頁)

「単に環境的なるものは個性的でないのみならず、単に主体的なるものも個性的でない。創造的なるもの、個性的なるものを媒介して、歴史的現実 に於て主体が環境を、環境が主体を限定するのである」(同上、五〇五頁)

「主体が環境を、環境が主体を限定する歴史的世界は、一と多との否定的相互限定の世界(個が何処までも個に対する世界)であり、一と多との矛盾的自己同一の世界は、主体が環境を、環境が主体を限定する歴史的世界である。而して与へられたものは作られたものであり、作られたものが作るものを作つて行くといふことから、個性的に自己自身を限定する世界は段階的に動いて行く。時代から時代へと考へられるのである。歴史の進行は何処までも不可逆的である。作られたものが作るものを作るといふ歴史的世界は、物質の世界から生物の世界へ、生物の世界から人間の世界へ発展するのである」(同上、五〇六頁以下)

* この「物質の世界から生物の世界へ、生物の世界から人間の世界へ発展する」とまったく同じ文言が「絶対矛盾的自己同一」(一九三九年、全集9、七二頁)に出てくるが、それについては、後にこの著作を取り上げる際に、改めて検討する。

「私は歴史的世界に於ては、主体が環境を限定し環境が主体を限定すると云つた。環境とは如何なるものであ

るか。／〔略〕歴史的世界は矛盾的自己同一として、内的に自己自身を媒介すると共に外的に媒介する。歴史的世界が何処までも外的に媒介せられると考へられる時、それが環境的である。そこでは種とか個とかいふものは否定せられる、生命といふものは否定せられるのである」（同上、五三四頁）

これらの引用群では、「歴史的世界」あるいは「進化」の世界における「環境」が明らかにされる。

第一および第二の引用では、「環境」と「主体」すなわち「人間」との相互依存関係、言いかえれば相互限定関係、あるいは作る・作られる関係によって、社会的には、すなわち「人間の世界」においては「歴史的世界」が、生物世界では「進化」の過程が形成されると説く。それを形相と質料との関係によって説明する。

第三の引用では、「歴史的世界」における「主体と環境との相互限定」とは、「一と多」の否定的相互限定」あるいは「一と多との矛盾的自己同一」のことだと敷衍する。「一と多」とは分かりにくい表現であるが、ここでは社会における個人と集団と見ることができると結論、この相互関係が「作られたものが作るものを作る」という関係で、その関係が成り立つ場である「歴史的世界」は、「物質の世界」から「生物の世界」へ、さらに「人間の世界」へ発展するというのである。ここにいう「物質の世界」は自然環境、「生物の世界」は進化の世界、「人間の世界」は社会のことと見て差し支えないであろう。これらは、「歴史的世界」のいわば三位相である。

第四の引用では、上に言及した「歴史的世界」における「主体と環境との相互限定」という場合の「環境」の意味を確認する。ここでは、「歴史的世界」における「環境」とは、「種とか個とかいふものは否定せられる、生命といふものは否定せられる」場所だ、といっているが、その意味は「物質の世界」でも「生物の世界」でもなく、第三の引用に見た最終位相の「人間の世界」だということであろう。

つきにもつばら「環境」概念が論じられる著作は、《絶対矛盾的自己同一》（一九三九年）である。ここでも「主体」と「環境」が「作るもの」と「作られたもの」との関係で語られるが、両者の相互依存関係は、新しい概念すなわち「絶対矛盾的自己同一の世界」を導入して、相互否定の関係として論じられる。

この「絶対矛盾的自己同一の世界」は後期西田哲学の根本概念の一つであるが、それは一体何のことか。ここではその意味の解明が主題ではないので深入りしないが、とりあえず、つぎの引用によって大まかに理解しておこう。

「主体が環境を形成する。環境は主体から作られたものでありながら、単に作った主体のものではなく、之に対立し之を否定するものである。我々の生命は自己の作ったものに毒せられて死に行くのである。何処までも主体が生きるためには、主体が更生して行かなければならない、絶対矛盾的自己同一の歴史的世界の種として世界の生産的となつて行かなければならない」(全集9、一六七頁)

「主体が環境を、環境が主体を形成すると考へられる絶対矛盾的自己同一の世界に於ては、物質的世界といふものも既に作られたものであり、作られたものは環境的として主体を形成し行く。物質の世界から生物の世界へ、生物の世界から人間の世界へ発展するのである」(同上、一七二頁)

第一の引用では、「絶対矛盾的自己同一の歴史的世界」という記述から、端的に、「絶対矛盾的自己同一の世界」とは「歴史的世界」のことを指していると読みとることができる。また、第二の引用の文言は、先に〈種の生成発展の問題〉(一九三七年)を検討した際に、「歴史的世界」の枠組みで引用した箇所(全集8、五〇六頁)とほとんど同じ内容であるだけでなく、まったく同じ文章が出てくる。そこには「……歴史的世界は、物質の世界から生物の世界へ、生物の世界から人間の世界へ発展するのである」とあったが、この後半の文章が上の引用の最終部分とまったく同一である。するとこの「絶対矛盾的自己同一の世界」という西田哲学独特の術語は、ここにいう「人間の世界」、すなわち「歴史的世界」の別表現と見て差し支えないことになる。

では、そういう世界では「主体」と「環境」とはどのような関係をもつか。

「絶対矛盾的自己同一」として現在から現在へと動き行く世界の現在に於て、何処までも主体と環境とが相対立

し、主体が自己否定的に環境を、環境が自己否定的に主体を形成する。而して現実の世界の現在は、主体と環境と、一と多との矛盾的自己同一として、決定せられたもの即ち作られたものから、作るものへと動き行く。それが過去から未来へと動き行くと云ふことである。作られたものと云ふのは既に環境に入つたものである。過去となつたものである。「略」多が自己否定的に一、一が自己否定的に多として、多と一との絶対矛盾的自己同一の世界に於ては、主体が自己否定的に環境を形成することは、逆に環境が新たな主体を形成することである。時の現在が過去へと過ぎ去ることは、未来が生ずることである。歴史の世界に於ては単に与へられたものと云ふものはない」（全集9、一五九頁）

ここでも、「絶対矛盾的自己同一」として現在から現在へと動き行く世界の現在」という文言から、「絶対矛盾的自己同一の世界」とは「現在から現在へと動き行く世界」、すなわち「歴史の世界」のことであることが知られる。そうして、そういう世界での「主体」と「環境」とは相對立し、相互に自己否定的に相手を形成する關係をもつたものである。現在におけるこのような「主体」と「環境」との關係によつて過去から未来への移行が可能となり、そこに歴史的世界が形成されるのである。

「真に矛盾的自己同一の世界に於ては、主体が真に環境に没入し自己自身を否定することが真に自己が生きていることであり、環境が主体を包み主体を形成すると云ふことは環境が自己自身を否定して即主体となることでなければならぬ。作るものが自己自身を否定して作られるものとなることが真に作るものとなる」と云ふことが、作られたものから作るものへと云ふことであるのである。生物的生命の世界に於てはいつも主体と環境とが相對立し、主体が環境を形成することは逆に環境から形成せられることである。単に主体的と云ふことそのことが却つて環境的たる所以である。自己自身を環境の中に没することによつて、環境そのものの中から生きる主体にして、歴史的主体と云ふことができる。そこでは環境は与へられたものでなく、作られたものであるのである。そこに

真に主体が環境を脱却すると云ふことができる」(全集9、一七七頁)

ここでは、先の引用での説明をさらに敷衍して、「矛盾的自己同一の世界」における「主体」と「環境」との相互否定関係によって「生物的生命の世界」が成り立ち、そこに「生きる主体」すなわち「歴史的主体」としての「主体」が形成されると説く。

「矛盾的自己同一」として自己自身を形成する世界は、一面には環境から主体へといふことでなければならぬ。それを生物的生命と云つたが、人間に至つてもそれを脱却すると云ふのではない。而して矛盾的自己同一としての人間の世界に至つては、それは単に本能的でなく、表現的形成的でなければならぬ。それが環境が何処までも自己否定によつて主体的となると云ふことである。矛盾的自己同一的な人間の世界では、主体が自己を環境に没することによつて主体であり、環境が自己否定によつて主体的となることによつて環境でなければならぬ。而して世界が斯くあると云ふことは、何処までも自己自身の中に世界を映し表現的形成的である個物が、自己自身を形成する世界の一角として備あると云ふことでなければならぬ」(全集9、一八三頁以下)

この引用では、先の引用を承けて、「絶対」矛盾的自己同一の世界は「自己自身を形成する世界」であり、それは要するに「生物的生命の世界」であることを確認したあと、「絶対」矛盾的自己同一としての人間の世界について語る。ここにいたつて、「絶対」矛盾的自己同一の世界とは結局「人間の世界」のことであることが明確に示される。

ここではさらに、「環境」が自己否定によつて「主体」となることを「表現的形成的」といい、それによつて「人間の世界」が形成されるといつているが、「環境」あるいは「世界」が「表現的」であることは、つぎの引用に受け継がれる。

「矛盾的自己同一的現在として、世界が自己自身を形成するといふ時、過去は既に過ぎ去つたものでありながら、自己矛盾的に現在に於てあるものである、無にして有である。作られて作るものたる我々に對して、世界は表現的である。我々人間に對しては、環境が何処までも表現的であるといふことができる。而してそれが作られたものから作るものへとして、何処までも我々に迫るといふ時、我々に直觀的である」(全集9、二〇二頁)

「ポイエシスを中心とする歴史的世界は、その創造の尖端に於て、無限の過去と未来とに對立する。而してそれは絶対矛盾的自己同一的現在に於ての對立として主体と環境との對立といふことができる。かゝる絶対的現在に於ての主体と環境との對立、相互形成は機械的でも、合目的でもあることはできない。環境は何処までも表現的であり、主体へ、作るものへ、何処までも直觀的に迫るのである」(同上、二〇三頁)

前者の引用では、「世界は表現的である」、「環境は何処までも表現的である」といつているが、それは「矛盾的自己同一的現在として、世界が自己自身を形成するといふ時」と限定されているのであるから、「表現的である」は、先に見たように、「歴史的世界」すなわち「人間の世界」の本性を表したものと見ることができる。この「表現的」とは、さしあたって、後者の引用に出てくる「ポイエシス」すなわち「作ること」とみなすことができるが、それは、その本質的な機能が言語表現であると考えていいからである。ここでは、その意味での「表現」が、「主体」と「環境」との對立・相互形成の場である「歴史的世界」(絶対矛盾的自己同一の現在)において中心となると明言している。

* ここにいう「表現的」の意味については、この論文の主題から離れるのでこれ以上言及しない。なお、この問題については、文献(7)で詳しく論じられている(第四章表現的世界)。

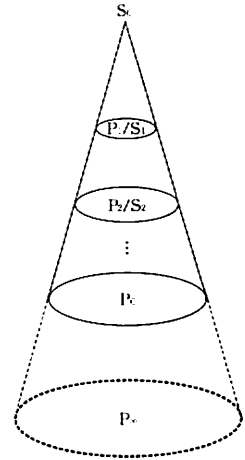
以上、冒頭に披瀝した西田哲学における「場所」と「環境」の関係に関する仮説について、直接著作に当たって検証してきた。では、このように検証された仮説は一般にどう解釈されるか、それをここに吟味し、一つの試論としてまとめてみよう。

「場所の論理」の構造については、上山春平⁹⁾が西田の議論から三つの主要点を取り出し、的確に解釈し、さらにそれを形式論理学の包摂関係によって簡潔に図式化している説明している(七三頁以下)。ここではそれを足がかりにして議論を進めていこう。

上山は、論理的なものの世界の両極に、西田のいう「個物」主語的基体¹⁰⁾をS、「無の場所」超越的述語面¹¹⁾をPとして配し、その枠組みの中で一般的な論理構造、すなわち、主語・述語関係 $\langle S \mid P \rangle$ が成立すると解釈し、「場所の論理の基本構造」として図式化する。要するに、一般的な「形式論理的包摂関係」 $\langle S \mid P \rangle$ は、「場所的限定関係」 $\langle S \mid P \rangle$ に組み込まれるというのである。

この上山図式には基本的には改良の余地はないが、この図の「個物S」と「無の場所P」に挟まれているSとPは相対的な関係で、より詳細に言えば、Sはより上の(特殊の)Sとの関係ではPであるし、Pはより下の(普通の)PからすればSである。すなわち、SとPは「於てあるもの」と「於てある場所」の関係になっているが、上位に向かえばこの「於てあるもの」は「於てある場所」に変じ、下位に次元をすらすらごとくに「於てある場所」は「於てあるもの」に転化する。ここではこの点を考慮し、この図に若干の改訂を施して「場所の構造」(図一)とする。

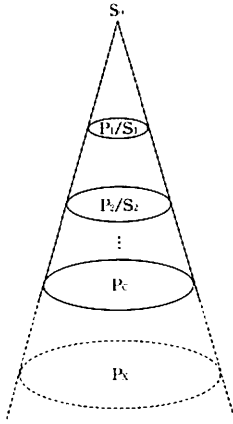
* 形式論理の包摂判断「SはPである」は、一般に普遍と特殊を含む・含まれるという集合関係にあることを意味するが、それを「於てあるもの」と「於てある場所」の関係と見たのが西田の「場所論」の独創である。すなわち、およそ「有るもの」は何か「於てなければならぬ」(全集4、二〇八、一三五頁)、言いかえれば、「SはPに於てあり、結局「有は無に於てある」(全集4、二六七頁)のである。これについては、文献(2)が簡潔に論じている(三三三頁以下)。



「場所」の構造

【図1】

この図で、 S_0 は「主語的基体」、 S_1, S_2, \dots は「主語一般」、 P_1, P_2, \dots は「述語一般」で、 P_0 は「基本述語（カテゴリー）」、 P_n は「述語面が無限大になる場所」（全集、二八八頁、再掲）、すなわち「絶対無の場所（超越的述語面）」である。いうまでもないが、ここでは $\langle S_0 \text{は} P_1 \text{である} \rangle$ 、 $\langle S_1 \text{は} P_2 \text{である} \rangle$ 、 $\langle S_2, \dots \text{は} P_0 \text{である} \rangle$ 、 $\langle P_0 \text{は} P_n \text{である} \rangle$ という判断の包摂関係が成り立つ。もちろんここで「 \sim である」は、精確には「 \sim に於てある」の意味である。先に検討した「場所」の三位相の議論を踏まえていえば、この「場所」は「有の場所」の相をとれば「環境」となる。この「環境」は、さらに具体的に人間の生活の場として、空間的には「人間の世界」、そして時間的には「歴史的世界」という位相をとることが明らかになった。その点を考慮して「環境」の構造を図式化（図2）してみよう。

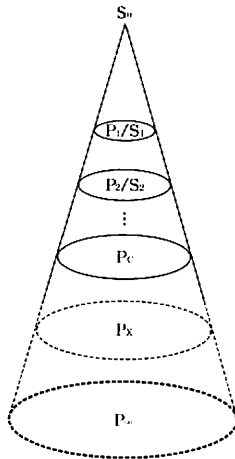


「環境」の構造

【図2】

この図の S_0 は「主体」、 S_1 、 S_2 、…は「働くもの（有るもの）」で特殊（種）、 P_1 、 P_2 、…は「働くもの（有るもの）」で普通（類）で、 P_c は「最普遍者（最高類概念）」、 P_x は「環境（有の場所）」を意味する。 S 、 P は西田の術語でいえば「働くもの」はすなわち有るものであるが、この有るものと有るものとの特殊・普遍関係を成立させる場所が「有の場所」としての「環境」である。この図の S_0 の「主体」をたとえば「私」とし、 $\langle P_1/S_1 \rangle$ 、 $\langle P_2/S_2 \rangle$ 、…にそれぞれ「家庭」「社会」「世界」を当てはめてみれば、主体「私」 S_0 は、「人間の世界」ではこうした階層秩序の中におさまり、結局はそれらすべての「於てあるもの」が、「於てある場所」としての「環境」 P_x に「於てある」ことになる。

このように見られた「環境」世界は、本論の冒頭で述べたように、「場所」が變成発展したものと解釈されるなら、それはさらにその枠組みを形成する「場所」のシステムの中に組み込まれることになる。それを図式化して、「場所—環境」の総合構造（図3）とする。



「場所—環境」の総合構造

【図3】

ここで、 S_0 は「生物的個体」、 $\langle P_1/S_1 \rangle$ 、 $\langle P_2/S_2 \rangle$ 、…は、それぞれたとえば「人間」「動物」「生命」…で、 P_c は「最普遍者」基本述語」、 P_x は「環境」、 P_c は「場所」である*。

* なお、この図の「環境」 P_x は「有の場所」、場所」 P_c は「絶対的無の場所」であるが、「場所」の三位相の議論からいえば、両者の中間にはいわば「相対的無の場所」としての「対立的無の場所」が位置して、その媒介の機能を果たすはずで

ある。しかし、本稿では「場所」と「環境」の関係が主題であるため、この図ではその点を省略し、「対立的無の場所」と「絶対的無の場所」が広義の「場所」P₂を構成し、両者がこの「場所」の階層構造をなすものとみなした。

この総合構造は、図式からみれば、要するに「場所」の構造(「図1」)、と「環境」の構造(「図2」)を重ね合わせただけのものであるが、このように透視図にすることによって「場所」と「環境」との関係がより明確になる。すなわち、「場所」の究極あるいは本質が人間の知が成立する「無の場所」であるなら、「環境」は、人間が身体として存立するいわば「有の場所」ということができるということを検討してきたが、この透視図によってその関係の眺望に焦点が定まってくる。人間は行為的主体としては精神(ノエシス)であり、その在処が「場所」として解明された。他方、人間は客体的存在あるいは生物的個体としては身体(ノエマ)であり、その在処が「環境」として探究された。この人間の精神と身体とを結びつける媒体としてはたらく究極の機能が高次の「場所」すなわち「絶対無の場所」として措定されたのである。

西田の「ノエシス・ノエマ」論による人間の精神／身体二元論の克服の試みについてはすでに検討した(本稿2節)が、このように図式化することによってその議論をさらに明確にすることができる。この究極の「場所」において「主客合一」が成立し、「自己が自己に於て自己を見る」(全集6、二八九頁、全集7、八八頁、再掲、等)機能が作用するなら、そこには「自己言及性」がはたらいていると解釈することができる。そうなら、結局、「絶対無の場所」こそ「自己言及性」を機能させる場であることになる(文献(1))、「第三章 西田哲学における「自己言及性」の構造」。極端に言えば、西田の言説はすべてそこに収斂していくとみなすことができる。

参考文献

- (1) 竹内昭「自己言及性」の哲学」二〇〇二年、梓出版社
- (2) 上田閑照「西田幾多郎を読む」岩波セミナーブックス38、一九九一年、岩波書店
- (3) 木田元・野家啓一・村田純一・鷲田清一編「現象学事典」一九九四年、弘文堂

- (4) 小坂国継「西田哲学の研究——場所の論理の生成と構造——」一九九一年、ミネルヴァ書房
- (5) 同「西田幾多郎の思想——二十一世紀をどう生きるか上・下」NHK「こころをよむ」テキスト、二〇〇〇/〇一年、日本放送出版協会
- (6) 茅野良男・大橋良介編「西田哲学——新資料と研究への手引き——」一九八七年、ミネルヴァ書房
- (7) 中村雄二郎「西田幾多郎」20世紀思想家文庫8、一九八三年／「西田幾多郎I」岩波現代文庫、二〇〇一年、岩波書店
- (8) 同「場所(トポス)」弘文堂思想選書、一九八九年、弘文堂
- (9) 上山春平「絶対無の探究」西田幾多郎「日本の名著47、一九七〇/一九七二年、中央公論社
- (10) 大橋良介「西田哲学の世界——あるいは哲学の転回」一九九五年、筑摩書房

(二〇〇二年八月下旬欄筆)
(哲学・第一教養部教授)